日本語と人称

富　田　信　一

I. 発話者と発話

発話者（énonciateur）が発話をする（énoncer）行為の結果生まれたものが発話（énoncé）である。また，その発話に「発話の主体」(sujet de l'énoncé）を考えるとき，発話者＝発話の主体である場合（これを①形式の発話と呼ぶこととする。）と，発話者≠発話の主体である場合（これを②形式の発話と呼ぶ。）とがある。今これを例によって示すと次の通りである。（なお，「発話の主体」の説明については稿を改めることとする。）

①形式の発話：発話者（景清）＝発話の主体（景清）
　「我一とせ尾張の国熱田にて，遊女とあひなれ此子をまうく。」
②形式の発話：発話者（日向の里人）≠発話の主体（景清）
　「景清は両眼盲ひましまして，せんかたなさに髪をおろし．．．」（景清）

ここで，①形式の発話から取りあげることになるのだが，上記の例では，「発話の主体」である「我」が指示されている。しかし一般には「発話の主体」の指示がない発話の方が多いので，順序として先ず①形式で「発話の主体」の指示がない発話の説明から始めることとする。

(1)　①形式の発話，発話者＝発話の主体，発話の主体の指示＝0

発話者（鵜使い）「いつもの御堂にあがって休まばやと思ひ候。」（鵜飼）
発話者（菜摘女）「若菜をつみて只今帰りて候。」（二人閑）
発話者（柏崎某の妻）「かひなき形見と思へども開いて見うずるにて候。」（柏崎）

上記の各発話において，その「発話の主体」は発話者自身であるが，その指示はない。最初の例で言えば，発話者（鵜使い）が御堂にあがって休もうというのである。ここでは「発

話の主体」の指示がないので，「発話の主体」の代りに発話者自身が発話の中に入りこみ，発話と直接に結びつく。言いかえれば，発話と発話者とが直結する。或は，発話は発話者の中に包摂されて，発話者と一体となり，発話は発話者自身の外に出ることはない。「御堂にあがって休まばやと思ふ」行為は発話者の中で完結し，発話者の「身」の外に出ることはない。柏崎某の妻の発話では，形見の文を開こうとする思いは発話者自身の中で行なわれ，その外に出ることはない。従ってこれらの発話はその発話者から独立することができない。発話と発話者とが結びついているからである。この種の発話を「発話の主体」の指示がある発話と較べてみると両者の相違が一層はっきりするであろう。

発話者（漁夫白龍）「われみほのまつばらにあがり，四方の景色を眺むるところに．．．」（羽衣）

「発話の主体」である「われ」は発話者から独立し，発話者の「身」から外に出て，三保の松原の上にあがるのである。「我」は時間と空間の中に存在し，その存在を顕示する。発話は発話者から独立する。これとは反対に，「発話の主体」の指示がない前述の各発話では発話者が発話の中に入り込んでしまうから，発話者の「我」が顕示されたり，誇示されたりすることは起こりえない。しかし，発話の中心は御堂に上がって休む，若菜を摘んで帰る，形見の手紙を開いて見るという行為におかれ，それらの行為が際立つと同時に，その発話に直結する発話者が尋ねられる結果となる。上述の各発話の場合のように，予め，その発話者が明示されていて発話される場合は問題ないが，この発話だけが独立して提示されると様々な問題が起こってくる。例えば，有名な和歌「駒とめて袖うちはらふかげもなし　佐野のわたりの雪の夕暮」が発話者の明示がなくて提示された場合，駒をとめて袖の雪を払う「発話の主体」「発話者」は誰なのかという問が必然的に起こる。これらの問題については後で詳述することとして，事ほど左様に，「発話の主体」の指示がない発話においては，発話は発話者に直結し，発話者が発話の中に入り込んで，発話の独立性を著しく損なう現象さえ起こすので，発話者が発話の中に入り込むことを抑制する措置もとられる。その例を上げて見よう。

1．発話者（平の恒正の霊）「あら面白の琵琶の音や。あら面白の琵琶の音や。風枯木をふけば晴天の雨，月平砂をてらせば夏の夜の，霜の起居も安からで，かりに見えつる草の陰，露の身ながら消えもせぬ，妄執の縁こそはかなけれ。」（恒正）
2．発話者（梅若丸の母）「人の親のこころは闇にあらねども，子を思ふみちに迷ふとは，今こそ思ひしら雪の，道ゆきぶりに誘はれて，行方いづくとさだむらん。あら定めなの憑みやな。」（墨田川）

1．は発話者＝発話の主体＝恒正の霊であって，発話の主体の指示は明確にはされていないと言えよう。というのは，アンダーラインをした「露の身」は，一般的には露のようにはかない身の意で，「発話の主体」恒正を特に指示しているとは言い難いからである。然し，発話者（小野の小町）「身は浮草をさそふ水，身はうき草をさそふ水，なきこそかなしかりけれ。」(卒都婆小町）の「身」が結果として発話者の身に結びつくのと同じ様に，「露の身」も恒正の身に結びつくこととなる。このことは二つの事を説明してくれる。一つは。「発話の主体」の指示がなされていない発話では，一般的には「身体」の意である「身」が発話者の身を指示することになるほど発話と発話者とは強く結びつく。もう一つは，この種の発話では「身」が結果として発話者の「身」を指示することになることを意識して，恒正の霊は自己の存在を草葉の陰に置き「露の身」として其の存在が顕示されることを回避するのである。この場合，もし「我」を使って発話者の自己を指示すれば，それはこの世における発話者の存在を顕示することになってしまうからである。「身」は発話者が自己を顧みる時に使われ，発話者の「身」は発話者を取り囲む外界と対峙している。これが「身」の基本姿勢である。上述のように，「発話の主体」の指示がなされていない発話ではその発話は発話者に包摂されてしまうので，発話によって示される行為も発話者の「身」の中に留まって，その外側に出ることがない。草葉の陰にいる発話者恒正の霊の「露の身」は発話者を取り囲む外界，すなわち，供養の琵琶の音，風の音，枯木，月　等々と対峙していて，今のところ，発話者の行為がその「身」の外に出ることはない。なお，あるかなきかの「露の身」に対峙している風や枯木も現実そのままを避けて「風吹枯木晴天雨，月照平沙夏夜雨，」(白氏文集）を下地にする配慮を尽くし，発話者の存在が現実の時間と空間の中に顕示されることを避ける一方で，発話によって示される行為，琵琶の音，妄執の縁を際立たせるのが，「発話の主体」の指示を欠く発話の目指すもののようである。

2の「墨田川」における発話者梅若丸の母の発話では，「発話の主体」の指示は全くない。従って発話者が発話の中に入り込んで，発話者が発話と直接結びつくことになるが，発話者梅若丸の母は行方知れずの子を尋ね歩く狂女であるから，少しでも子を思うことを口にすれば，その発話はたちまち発話者と結びついて発話の客観性を損なうことは必定である。すなわち，過剰に発話者が発話の中に入り込むことを避けるために，子についての発話は「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（藤原兼輔）というよく知られている和歌をそのまま借用し，その子を思う行為も「今こそ思ひ白雪の」と動詞を白雪という名詞に代えて発話者と発話の結びつきを避け，かつ又，「白雪」は子を尋ねる行為のために借用した「春来れば雁帰るなり白雪の道行ぶりに言やつてまし」の序となっている。ともかく，「行方いづくとさだむらん。あら定めなの憑みやな。」という発話者の「身」に高まる思いを際立たせると同時に，発話の中に発話者が過剰に入り込むことを抑制して，発話が少しでも

発話者から離れられるようにする努力が続けられる。この意味で「白雪」を使った名詞化は単なる言葉の遊びではなくて，「其こころ更に夏川に，」や「うき身は何と楢の葉や，」と同じく，発話が発話者に直結するのを避けて，発話が発話者から少しでも独立するための配慮だといえる。このように発話者と発話との結びつきを抑制する様々な配慮にもかかわらず，「人の親の心」，「子を思ふ道」，「行方いづく」等々は発話者梅若丸の母がその子を思い尋ねる行為に直結しようとする勢いをその中に秘めている。

1．発話者（平の盛久）「かくてながらへ人に面をさらさむよりは，あつぱれとうきられ候はばや。」

2．発話者（平の盛久）「我此程清水の観世音を信じ奉り，毎日御経怠ることなし。」

3．発話者（平の盛久）「盛久も思ひの外なれば，只亡然とあきれ居たり。」　　（盛久）

1，2，3とも発話者＝「発話の主体」＝平の盛久①形式の発話で，1は「発話の主体」の指示がなく，2は「我」で，3は「盛久」で「発話の主体」を指示をしている。この三つの例を較べることで，各例の相違を明らかにしてみよう。1．の発話は，発話者＝発話の主体＝平の盛久であって且「発話の主体」の指示がなされていないから，発話は発話者に直接結びつき，「発話の主体」の代りに発話の中に発話者が入りこんで，発話は発話者の「身」のなかに包摂されてしまう。すなわち，「あっぱれとう斬らればや。」という発話者の願いはもちろん発話者盛久の「身」のなかに全て納まっている。ところが，「人に面をさらさむよりは」の「人に面をさらす」行為は発話者の存在を発話者の「身」の外に置くことであって，これは上例2の発話者の「我」が発話者の「身」の外に置かれることと同じである。それよりは「身」のなかに留まることを願っているわけだから，「発話の主体」の指示のない，発話者の「身」のなかに発話の全てが納まっているこの発話の形式が発話者盛久の願いに最もよく適合したものといえよう。ところで，この発話のフランス語訳を見てみると，

Plutôt que de vivre ainsi plus longtemps et que d′ exposer ma honte à la vue de tous.
ah puissé-je être sur l′ heure frappé à mort

このフランス語訳では ma　honte と，puissé-je の二か所で「発話の主体」の指示がなされている。exposer ma honte の方は「人に面をさらす」に相当するから，「身」の外に「我」を顕示する行為を表わすのに ma を使うことがふさわしい。問題は puissé-je の方であって，

je は発話者の「身」の外にある「我」の存在を指示することがないという点では日本語と一致するが，この puissé-je être... と言っている発話者当人を指示することにはなるのだから，この「発話の主体」の je があるために，この発話は発話者から完全に独立する。日本語にあっては，「発話の主体」の指示がない発話の場合，発話者が発話の中に入り込み，発話は発話者の「身」に包摂されてしまうが，フランス語の je の存在は発話者が発話の中に侵入するのを阻止する働きをしているのだとも言える。上記 2 の「我此程清水の観世音を信じ奉り，」は，「発話の主体」＝「我」を指示することで，「我三保の松原にあがり」と同じく，発話者の「身」の外に「我」の存在を顕示することとなる。つまり，「発話の主体」を指示すると，発話者が発話の中に入り込まないから，その発話は発話者から独立し，「発話の主体」である「我」も発話者から独立する。かくして，発話者は「我」の存在を世の中に明示することとなり，発話「我此程清水の観世音を信じ奉り，」は発話者が清水の観世音を信じている行為を世の中に顕示することとなるのである。というのは「①形式の発話　発話者＝発話の主体，発話の主体の指示なし」の発話の方が日常使われている発話であり，然もこの発話にあっては，発話者の存在は発話の中に入り込んでしまって明示されることがないから，発話者は発話の中に潜んで外に現われないのだが，①形式の発話で「発話の主体」を指示すれば，それは「発話の主体」を殊更に際立たせる結果となり，「我」は発話者から独立すると同時に，現実の時間と空間の中でその存在を顕示することになる。その例を二三あげてみる。

1．発話者（紫式部の化身）「先石山に参りつつ，源氏のくやうをのべ給はば，其時我もあらはれて，共にげんじを弔ふべし。」（源氏供養）
2．発話者（平忠度の霊）「我も舟にのらんとて，汀の方に打出でしに，．．．」（忠度）
3．発話者（深草の少将の霊）「つつめど我もほにいでて，つつめど我もほにいでて，尾花，まねかばとまれかし。」（通小町）
4．発話者（逆髪）「我は王子なれども疎人に下り，．．．」（蟬丸）

1．の発話は，これに先立つ安居院の法印の発話「石山に於いて源氏の供養をなすべきことは，安き間の御事也。さてさて御身はいかなる人ぞ。」に対する答えの発話である。話相手が「御身」と呼ぶ時，御身と呼ばれている方の人の「身」は不可侵のものとして扱われている。その「身」の中から発話者紫式部の化身は「我」となって，現実の時間と空間の中の存在として顕われ出ようというのである。2．の発話は「一の谷の合戦」がいよいよ始まろうとして，忠度の晴れの出陣を示す「我」であって，「舟に」が現実の場所を指示する。3．は地獄の苦患に耐えている深草の少将の霊が草葉の陰にひそんでいる間は「身」で指示され

るが，僧の戒力によって芒の穂のように身の外に顕われ出るとき，それは「我」で指示される。４．の発話者逆髪は「狂女」という日常の人とは異なった状態にあるし，また，延喜第三の王子という身分でもあるから「我は王子なれども」と自己をこの世に顕示する。さて次には，「発話の主体」を指示するときに「我」の代りに，その名前，通称，呼び名等を用いる場合を検討することにするが，①形式，②形式の発話に，「発話の主体」の指示の有無が組み合わさることになるので，その組合わせを次のように整理しておく。

①形式の発話　発話者＝発話の主体　発話の主体の指示なし．．．①－０の発話
①形式の発話　発話者＝発話の主体　発話の主体の指示あり．．．①－１の発話
②形式の発話　発話者≠発話の主体　発話の主体の指示なし．．．②－０の発話
②形式の発話　発話者≠発話の主体　発話の主体の指示あり．．．②－１の発話

(2)　①－１の発話と②－１の発話

①－１の発話で「発話の主体」の指示に発話者の名前を使う場合も，「発話の主体」の指示があるのだから，その発話は発話者から独立し，その「発話の主体」は世の中の時間と空間の中に，その存在を顕示することになるのは「我」の場合と同じである。但し，「我」は①－１の場合には「発話の主体」を指示するのに使われるが，②－１の場合の「発話の主体」を指示する場合には普通使わない。しかし，名前は，①－１でも，②－１でも「発話の主体」の指示に使うことが可能である。以下の２，３，４は１の用例を敷衍したものである。

１発話者（平の盛久）「我なまじひに弓馬の家に生まれ。」．．．①－１の発話　　（盛久）
２発話者（土屋　某）「我なまじひに弓馬の家に生まれ。」．．．②－１の発話
３発話者（平の盛久）「盛久なまじひに弓馬の家に生まれ。」．．．①－１の発話
４発話者（土屋　某）「盛久なまじひに弓馬の家に生まれ。」．．．②－１の発話

３と４の発話で，「発話の主体」を指示する名前「盛久」は，発話者から完全に独立していて，発話者が盛久であろうと土屋某であろうと，又は全く別の人であっても，この同じ発話を使うことが可能である。即ち，この発話は発話者から完全に独立している客観性をもった発話ということができる。ところが，１と２との発話では「発話の主体」を指示するのに「我」を使っているので①－１の発話では使えても，②－１の発話として使う場合には例えば，発話者が土屋某であれば，発話者は「発話の主体」盛久になり代わって「我」というか，或は発話者土屋某が盛久の「身」に「憑いて」，「我」と発話することとなる。そこで今度は①－１と②－１の発話との関係について調べてみることとする。

1．発話者（平の盛久）「盛久かかる時節にあふ事，世もって隠れあるべからず。」（盛久）
2．発話者（自然居士）「居士はきと推量する子細の候。」（自然居士）
3．発話者（漁夫白龍）「はくれう衣を返さねば，」（羽衣）

1．の発話で「盛久」という名で呼ばれている存在は発話者盛久によっても，また話相手土屋某によっても同一人であることが確認されている。発話1．の中の「発話の主体」盛久は発話者平の盛久からは全く独立した存在であって，互いに他人同志のような関係に置かれている。というのはこの発話1．を話相手である土屋某がそっくりそのまま発話すれば，発話者土屋某の「発話の主体」盛久に関する同じ内容の発話となる。すなわち，この発話は発話者盛久からは完全に独立していて，同じ発話の状況にあって盛久の立場を理解しているものであれば，誰でもこの発話の発話者となることができる。次の一連の発話は全てこれと同種のもので，奇跡がその当事者の願望などで起ったものではなくて，客観的な事実であることを伝えるために意図的に採用された発話方法である。

発話者（平の盛久）「盛久やがて座に直り，清水のかたはそなたぞと，西に向ひて観音の，みなを唱へて待ちければ，」
発話者（太刀取）「太刀とりうしろにまはりつつ，称念の声の下よりも，太刀ふりあぐればこはいかに，御経の光眼にふさがり，取落したる太刀をみれば，ふたつに折れて段段となる。こはそもいかなる事やらん。」
発話者（平の盛久）「盛久も思ひの外なれば，只亡然とあきれ居たり。」

発話者である平の盛久や太刀取が発話するよりも彼らを傍らで見ている者が発話する方が相応しいと思われるような発話の連続である。これらの発話は「発話の主体」の指示と同じ人が発話者になるという訳ではなく，それぞれの発話者が些かの主観もまじえず，誰が見ても公平な発話をしようと意図した結果，このような発話の方法をとったのである。ここで確認しておく必要のあることは，同一の発話を異なった二人，例えば話し手と話相手の二人が発話できるとき，その発話者はその発話が話相手によっても確認されていると確信して発話しているということである。すなわち，上記2．の発話で自然居士が「居士はきと推量する子細の候。」と発話するとき，「居士」が自然居士を指示する通称であることを話相手も確認しており，その「居士は」で始まる発話は発話者から完全に独立しているから，同じ発話を話相手も容認してそのまま発話することができると確信して「きと推量する子細の候。」というのである。発話者は話相手もこの発話を確認していると信じて「居士は」と発話する。

さて，3．の発話「はくれう衣を返さねば，」に移る。発話者漁夫白龍が「はくれう」と

「発話の主体」を指示しているから，上述のようにこの発話は発話者から完全に独立している。すなわち，このままの発話を話相手である「天人」が発話者となって発話することも可能である。「はくれう衣を返さねば,」という発話は漁夫白龍にとっても，天人にとっても同じ事実なのである。そこで次の関係が成り立っている。

発話者漁夫白龍①－１の発話→「はくれう衣を返さねば」←発話者天人②－１の発話

この発話の前後の問答のなかでの関係を調べてみる。

発話者天人	「悲しやなはごろもなくては飛行の道もたえ，天上に帰らん事も叶ふまじ。去とてはかへしたび給へ。」	①－０の発話
発話者白龍	「此御ことばを聞くよりも，いよいよはくれう力をえ，かなふまじとて立ちのけば,」	①－１の発話
発話者天人	「今はさながら天人も，はねなき鳥のごとくにて,」	①－１の発話
発話者白龍	「あがらんとすれど衣なし。」	②－０の発話
発話者天人	「地に又すめば下界なり。」	①－０の発話
発話者白龍	「とやあらん,」	②－０の発話
発話者天人	「かくやあらむとかなしめども,」	①－０の発話
発話者白龍	「はくれう衣を返さねば,」	①－１の発話
発話者天人	「力及ばず,」	①－０の発話
発話者白龍	「せんかたも,」	②－０の発話

最初の天人の発話は①－０形式であるから発話は直接発話者に結びつき，天人が天上に帰ることができなくて悲しいというのであるが，これに続く白龍の発話は①－１形式であって，「はくれう」という「発話の主体」の指定があって，「いよいよはくれう力をえ」については，上述のように，発話者白龍①－１の発話→「いよいよはくれう力をえ」←発話者天人②－１の発話の関係が成り立っていて，白龍も天人もこの同じ発話を発話することが可能である。即ち，二人はここで同一の「発話の状況」の中に入ったことになる。以下，この「発話の状況」を理解するために，問答の形を変えて，一連の「語り」の形でこの発話を書き換えてみると，次の通りとなる。

「今はさながら天人も，はねなき鳥のごとくにて，あがらんとすれど衣なし。地に又すめば下界なり。とやあらん，かくやあらむとかなしめども，はくれう衣を返さねば，力及ばず，せんかたも」となる。これは「発話の主体」が天人の語りであるから天人が発話者となって

全てを発話しても差支えない。しかし，この発話者天人の考えや心情を完全に理解している話相手白龍がいて，天人と同じ「発話の状況」の中に入り，天人に成り代わって「あがらんとすれど衣なし，」「とやあらん」「はくれう衣を返さねば，」「せんかたも，」の発話をする。発話者白龍がこの天人の語りの全てを発話することも当然可能なわけであるが，「あがらんとすれど衣なし。」は発話者白龍の発話にした方が天人自身の発話よりも天人の受難の様子がより切実に見えるし「はくれう衣を返さねば」をもしも天人の発話とすれば，それは「力及ばず」の理由を述べるだけに終ってしまうが，発話者白龍の発話とすれば，白龍は天人の困惑を十分に理解した上で，白龍自身がこの発話をするという底意地の悪さを示すことができるのである。もちろん，「はくれう衣を返さねば，」については，発話者白龍①－１の発話→「はくれう衣を返さねば，」←発話者天人②－１の発話の関係にあって，アンダーラインをした発話の中の「はくれう」は発話者白龍からも，又，発話者天人からも独立していて，両者から等距離の位置にある。両者はその姿，形，空間において占める位置を異にするが，その考えや，心情を互いに理解しあう点では，全く対称の関係にある。

さて，上述と同類の発話の中で，「はくれう」という名前の代りに「我」を用いて「発話の主体」を指示する場合について検討してみることにする。用例は「黒塚」で，熊野の山伏東光坊阿闍梨祐慶は同行の山伏とともに，みちのく安達が原に行き暮れて，賤の女（鬼女）の庵に一夜の宿を乞う。その宿を強要する問答の終の部分から「語り」に入るところを引用する。

発話者（山伏二人）「いかにやあるじ聞き給へ。我等はじめてみちのくの，安達が原に行暮れて，宿をかるべき便なし。願はくは我等を憐みて，一夜の宿をかし給へ。
発話者（賤の女）「人ざと遠き此野べの，松かぜさむき閨の内に，いかでお宿を参らすべき。
発話者（山伏）「よしや旅ねの草まくら，今宵ばかりのかりねせむ。ただただ宿をかしたまへ。
発話者（賤の女）「すみなるる我だにもうき此庵に，　①－１の発話
発話者（山伏）「只とまらんと柴の戸を，　①－０の発話
発話者（賤の女）「さすが思へば，　①－０の発話
発話者（山伏）「いたはしさに，　②－０の発話
発話者（同音）「さらばとどまり給へとて，樞を開き立出づる。こと草もまじるかやむしろ，こと草も混じる萱むしろ，うたてや今夜しきなまし。．．．．

最初の山伏二人の発話の中で，「発話の主体」が「我等」で指示される「我等はじめてみ

ちのくの，安達が原に行暮れて，宿をかるべき便なし。」の部分は①－１形式であって，発話は発話者から独立し，発話者山伏二人にとっては此の部分だけは是非とも次の形，発話者（山伏二人）①－１の発話→「我等はじめてみちのくの，」←発話者（賤の女）②－１発話を成立させ，発話者山伏二人と発話者賤の女とが同じ「発話の状況」の中に入ることを期待したいところである。しかしそのためには，発話の中に発話者山伏が二人も入り込んでその発話を近寄り難い威圧的なものにしていることが妨げとなる。また，「我等はじめてみちのくの，．．．」の発話を発話者賤の女が②－１の発話として受入れるためにも「発話の主体」の「我等」が妨げとなる。というのは，もし「発話の主体」が「我等」でなくて「我」であれば，この発話は「我はじめてみちのくの，．．．」となり，賤の女は話相手の山伏一人と「我」を共有することができて，両者は同じ「発話の状況」の中に入って互いに相手の考えや心情を理解することができるようになる。すなわち，発話者（山伏）（一人）①－１の発話→「我はじめて．．．」←発話者（賤の女）②－１の発話　が成立することになるのだが，今は「我」ではなくて「我等」となっているのが障害である。かくして，「我等はじめてみちのくの，」で始まる発話は威圧的な宿を強要する発話になっている。次の「人ざと遠き此野べの，．．．」は①－０の発話であって，発話は発話者に直接結びつき，発話は発話者の「身」の中に留まるから，話相手の山伏はその発話の中に立ち入ることはできない。そこで，発話者（山伏）は「よしや旅ねの草まくら，．．．ただただ宿をかしたまへ。」という①－０の発話で強烈に宿を強要する。次が問題の　発話者（賤の女）「すみなるる我だにもうき此庵に，」である。もちろん，発話の主体「我」の指示があるから①－１の発話で，ここで始めて発話が発話者から独立し，「我」は発話者の「身」の外に出て現実の時間と空間の中の存在を指示することとなる。さて，「我だにもうき」の発話は上述の「羽衣」の天人と漁夫白龍との門答の場合と同様に，

発話者（賤の女）①－１の発話→「我だにもうき．．．」←発話者（山伏）②－１の発話

の関係を発話者賤の女と山伏との間に成立させ，発話者同志が同じ「発話の状況」の中にいることの確認ができると，この時を待ち構えていた発話者山伏は「只とまらんと柴の戸を，」と発話を続けて，柴の戸に手を掛ける。

以下，上記の「羽衣」の場合と同様，問答を「発話の主体」賤の女の語りの形に書き換えてみると，「すみなるる我だにもうき此庵に，只とまらんと柴の戸を，さすが思へば，いたはしさに，さらばとどまり給へとて，樞を開き立出づる。」となる。この語りの全体が，発話者賤の女の①－１の発話ともなり，同時にまた発話者山伏の②－１の発話ともなることができれば，発話者賤の女と発話者山伏とは同じ「発話の状況」の中にいて，両者は同じ考え

と心情を共有することとなる。「羽衣」の場合だと，「はくれう衣を返さねば，」の「はくれう」は発話者にも，その話相手にも確認されている名前だったから，「はくれう」は発話者から完全に独立した存在となって，発話者白龍にとっては①－１の発話，話相手の天人にとっては②－１の発話となりえたが，「すみなるる我だにもうき此庵に，」の場合は，「我」が発話者の賤の女から独立しているとは言っても，矢張，「我」＝　発話者（賤の女）ではないのか，という疑問が残る，「羽衣」の白龍の場合には，発話者白龍①－１の発話→「はくれう衣を返さねば」←発話者天人②－１の関係で，発話者白龍と「発話の主体」はくれうとの距離と，発話者天人と「発話の主体」はくれうとの距離とは互いに等しい，即ち，発話の主体「はくれう」を中心にして発話者白龍と発話者天人とは等距離にあったが，「黒塚」の場合には，発話者賤の女①－１の発話→「すみなるる我だにもうき此庵に，」←発話者山伏②－１の発話　の関係で，発話の主体「我」を中心にして，「我」は発話者賤の女の方により接近していて，発話者山伏とは遠去かっているのではないかという疑問が起きる。この点については，現代の自己主張を重視する考え方が「発話者」と「我」との距離を殊更に縮めているのか，或は，ヨーロッパ語などの影響で，発話者が「発話の主体」の「私」，「僕」，「俺」等を指示することが日常のことになっているので，発話者と「我」との距離を縮めているのかである。しかし，テキストに使った謡曲本の時代には，発話者は日常の発話では「発話の主体」を指示しない方が普通で，この場合には既に述べた通り，発話者は発話の中に入り込んで消滅してしまう。だから，「発話の主体」の「我」を指示することは「我」という存在を顕示することに等しかったことはもう既に説明した通りである。即ち，「我」は「はくれう」，「盛久」等の名前で指示される存在と同じく「発話者」から完全に独立した，離れた存在だったのである。　かくして，「すみなるる我だにもうき此庵に，」の発話の「発話の主体」である「我」は発話者から完全に独立した現実の時間と空間のなかにいる存在を指示している。この発話は発話者賤の女の発話であることはもちろん，発話者山伏も「発話の主体」賤の女に成り代わってこの発話を発話することができる。この発話がきっかけとなって，同じ「発話の状況」の中にいることとなった賤の女と山伏は以下の発話を二人の内のどちらが発話しても差し支えない。即ち，「只とまらんと柴の戸を，」の発話は，発話者山伏の①－０の発話となることも可能であるし，また，発話者賤の女が山伏に成り代わって②－０の発話として発話することも可能である。

発話者Ａの①－０の発話→「只とまらんと柴の戸を」←発話者Ｂの②－０の発話
「さすが思へば，」
「いたはしさに，」

「只とまらんと柴の戸を,」について説明すれば,「発話の主体」山伏が柴の戸に手を掛けながらする発話ともなりうるし，また，山伏のこの行動を見ての賤の女の発話ともなりうる。また，もしこの発話が上述のような「発話の状況」から離れて，全く独立して提示された場合，先ず考えられることは，この発話の「発話の主体」は誰か，次には，発話者は「発話の主体」と同じ人か，それとも異なる人か，ということであろう。そこで，上記の引用文の最後にある「同音」の発話に移る。

「さらばとどまり給へとて，樞を開き立出づる。」という発話について，先ずは,「発話の主体」は誰かというと，これまでの経緯からして「賤の女」がとぼそを開いて出てくるのが至当である。すると，次には，発話者はということになって,「発話の主体」と同じ人というと，賤の女ということになるが，自分の行為を自分で説明するのも不自然である。それでは，宿を強要して柴の戸に手を掛けた山伏かというと，今手を掛けたばかりの戸から出てきた女について，山伏が「さらばとどまり給へとて，．．．」と発話するのも不自然である。そこでこの「同音」という発話者を「発話，発話の主体，発話者」の関係で説明してみようと思う。もちろん，能の演出の過程における同音の成立についての諸説はあるのだが，今はそれには触れずに,「発話，発話の主体，発話者」の関係だけで考えてみることにする。先ず上述の次の関係の図式をもう一度かかげる。

発話者賤の女①－１の発話→「すみなるる<u>我だにも</u>←発話者山伏②－１の発話．．図式１
うき此庵に,
発話者賤の女②－０の発話→「只とまらんと柴の戸を←発話者山伏①－０の発話．．図式２

これまでは発話者を中心にして，発話者と「発話の主体」との関係を考えてきたが，今度は発想を転換して，図式の中央に掲げられた「発話」を中心に考えてみる。先ず，図式１の発話において,「我」は発話者賤の女の「身」からその外に離れ出て,「みちのく安達が原，秋，松風，柴の庵，賤の女，山伏等々」が形成る世界の中の一存在となったのである。而して，この「我」がこれまでの発話者であった賤の女からも，山伏からも等しい距離を置いて彼らを眺めた発話をする。これが発話者「同音」の発話である。かくして,「同音」の発話「さらばとどまり給へとて，樞を開き立出づる。」で賤の女の「身」は戸ぼそを開けて柴の庵の外に出ることとなるのだが，このような「同音」の発話を可能にしているものは，上記図式１，２，の発話が発話者賤の女，山伏両者の発話として可能であるというところから由来する。即ち，図式１の発話で，賤の女，山伏の両発話者が「我」を共有できることについては既に述べたとおりであるが，図式２の発話についても，山伏が柴の戸に手を掛けながらの発話とすれば①－０の発話であるし，また，こうした山伏の行為を見ている賤の女の発話

とすれば②－０の発話となる。従って，図式２の発話はその中に①－０及び②－０の発話を重ね合わせてもっている。これを発話の「重合」と呼ぶことにすると，先の「同音」の発話「さらばとどまり給へとて，．．．」も賤の女と山伏の発話の重合である。「同音」の発話と「発話の重合」との関係については，このあと「身から我へ」の章で説明することとして，まずは「発話の重合」の現象そのものについて調べてみることとする。

(3) ①－０の発話と②－０の発話との重合

１）駒とめて袖うち払ふかげもなし　佐野のわたりの雪の夕暮

この定家の名歌は「発話の主体」の指示がないから，①－０の発話でもあり，また②－０の発話でもありうる。その「発話者」と「発話の主体」とが尋ねられる発話である。「鉢の木」では次のように使われる。

発話者（佐野弾正左衛門常世）「．．．なうなうお客僧御宿参らせうなう。痛はしやもとふる雪に道を忘れ，今ふる雪に前後を亡じて，袖なる雪をうち払ひうち払ひたたずみ給ふをみて，古歌の心に似たるぞや。駒留めて，袖うち払ふ陰もなし。佐野のわたりの雪の夕ぐれ。かやうに読みしは大和路や。三輪が崎なる佐野のわたり。
発話者（同音）「是は東路の，さのの渡りの雪のくれに，迷ひつかれ給はんより，みぐるしく候へど，一夜はとまり給へや。．．．　（鉢の木）

発話者佐野はワキ僧最明寺入道が降りしきる雪のなかで難渋している様子をみて，「古歌の心に似たるぞや。」と　この歌をそのまま引用する。そこで，この歌をこの「発話の状況」にそのまま当てはめてしまえば，発話者佐野は「発話の主体」最明寺が駒を留めて袖の雪を払う陰を探しているのを見ていることになる。つまり，この歌を発話者≠発話の主体，②－０の発話として使ったことになる。因に，フランス語の訳を見ると，

Par la neige qui tout à l′heure tombait, il ne distinguait plus sa rooute; par la neige qui tombe à cette heure, il a perdu son chemin, et se tient là, de sa manche secouant la neige; de le voir secouant sa manche
とあって，最明寺入道はもちろん，il と le で指示し，道，袖等は sa route, son chemin, sa manche，と指示する。ところが，発話者佐野がこの古歌を発話する訳だから，そのとき，この歌は　発話者＝発話の主体　①－０の発話　の可能性をもっているから，発話者は発話の中に入り込み，発話と直接結びついて発話者佐野が駒を留めて袖の雪を払う陰を探す意も

含まれてくる。再び，フランス語訳を見てみると，

voilà qui rappelle le sentiment qu′ évoque l′ antique poème
arrêtant ma monture
pour secouer ma manche il n′ est d′ abri aucun
au gué de Sano crépuscule de neige

とあって，今度は，ma monture, ma manche，と，我が駒，我が袖は発話者＝発話の主体①－０の発話を示唆する。すなわち，「駒とめて．．．」の発話は或るときは３人称，また或る時は１人称で表わされている。然し実際には，この発話は同時に１人称でもあり又３人称でもある。即ち，この発話の中には①－０の発話と②－０の発話とが重なり合って含まれている。このことは，「駒留めて袖うち払ふ陰もなし」という上の句に発話者佐野が「佐野のわたりの雪の夕暮」と下の句を付けるなどの表現法も考えあわされるが，ここでは，発話「駒とめて．．．」には①－０の発話と②－０の発話とが重合して含まれていることを確認して，次の「鵜飼」の例に移ることにする。

２）発話者（シテ尉鵜使い）「鵜舟にとほすかがり火の，後の闇ぢをいかにせむ。勝やよの中をうしと思はばすつべきに，其こころ更に夏川に，鵜つかふ事のおもしろさに，殺生をするはかなさよ。伝へきく遊子伯陽は，月にちかって契りをなし，夫婦ふたつの星となる。今の雲の上人は，月なき夜はをこそかなしみ給ふに，我はそれに引きかへ，月の夜比をいとひ，闇になるよをよろこべば，鵜舟にとほす篝火の，消えて闇こそかなしけれ。つたなかりける身の業と，つたなかりける身の業と。今はせんぴをくゆれども，かひも浪まに鵜舟こぐ。是程惜しめども，叶はぬ命つがんとて，いとなむ業の物うさよ。いとなむ業の物うさよ。

（鵜飼）

冒頭から「夫婦ふたつの星となる。」までは，発話者「鵜使い」の①－０の発話である。先ず，最初の「鵜舟にとほすかがり火の，後の闇ぢをいかにせむ。」の発話は，「発話の主体」の指示がないから，①－０の発話の常として，発話者が発話の中に入り込んで発話と直接結びつく。すなわち，鵜舟にかがり火をともすのも，闇路に迷うのもともに発話者鵜使いということになるが，又，同時に②－０の発話として例えば鵜舟に或る一人の鵜使いとか，一般の人の一人とかを配して，他者がこの発話をすることも可能である。「おもしろうてやがてかなしき鵜舟かな」の一句もある。従って，この「一声」の発話の中には①－０の発話と②－０の発話が重合している。そして，①－０の発話の発話者は鵜使いの「身」である。というのは①－０の発話は既に述べたように発話者の「身」の中で終始するからである。また，②－０の発話の発話者は発話者鵜使いの「我」である。「我」は「身」から外に出て，「身」の

行動を外から世の中の一員となって見ているからである。次の「勝やよの中をうしと思はばすつべきに，其こころ更に夏川に，鵜つかふ事のおもしろさに，殺生をするはかなさよ。」も①－０の発話と②－０の発話とが重合している発話である。「一声」の発話と同様に，①－０の発話では発話者は発話と直結し，発話は発話者の「身」のなかで終始する。それ故，この発話の発話者は発話者鵜使いの「身」である。一方，これと重合している②－０の発話の発話者は発話者鵜使いの「我」であって，「我」は「身」から離れて外に出，世の中の一員として，鵜使いの「身」を眺め，「世の中をうしと思はば捨つべきに，」などと発話する。このように，「発話の主体」の指示がない発話では，①－０の発話と②－０の発話とが重合して存在し夫々の発話者は「発話者」の「身」と「我」であって，「身」の発話は①－０の発話，「我」の発話は②－０の発話で，これがやがて「同音」の発話に移行することとなる。

さて，上記の発話者鵜使いの発話の冒頭から「殺生をするはかなさよ。」までは上述の通り①－０の発話と②－０の発話との重合である。次の遊子伯陽と雲の上人との発話は，昔と今の文人貴人と「月」の話で，「賤民」である発話者鵜使いの「月」を際立たせるためのものだった。ここで，「我はそれに引きかへ」と「我」が登場する。これまで①－０の発話では発話は発話者鵜使いの「身」の中に留まっていた。しかしここで初めて「我」が「身」から離れて現実の時間と空間の中に登場し，現実の「月」を厭い，現実の「闇」をよろこび，闇夜のかがり火に鵜使いの生きる喜びをうたい，火の消えた闇夜を悲しむ。そこで，「我はそれに引きかへ，月の夜比をいとひ，闇になるよをよろこべば，」の発話は①－１の発話である。もちろんこの発話者に話相手がいれば②－１の発話ともなりうるし，「同音」の語りに移行する要素も備えてはいるが，今は①－１の発話にとどまっている。但し，この発話に続く「鵜舟にとほす篝火の，消えて闇こそかなしけれ。」の発話はその中に①－１の発話と②－１の発話とが重合している。また，「つたなかりける身の業と，．．．．いとなむわざの物うさよ。」の発話は再び①－０の発話と②－０の発話との重合であって，発話は「身」のなかで終始し，折角，「我」が登場して現実の時間と空間の中で生き生きとした篝火が燃えたのに，再び暗い「身」の世界に舞い戻った感じが強い。正に，鵜舟の火が消えて，闇路に迷う発話者鵜使いの亡霊の身を象徴している。この発話の暗さは①－０の発話に起因する。即ち，①－０の発話では発話者が発話の中に入り込んで発話は発話者の「身」の中に包み込まれてしまう。そこで発話者と発話との結び付きを些かでも断ち切ろうとする試みが「用言」の名詞化である。此発話のなかで言えば，「かひも浪まに鵜舟こぐ。」がそれで，「なし」を「浪間」に変えて発話者が発話に立ち入ることを阻止する。このことで①－０の発話の力が弱まり，②－０の発話の勢力が増大する。①－０→「身」と②－０→「我」とが重合している発話の中では②－０→「我」の力が強まれば，発話から発話者を遠去け，発話は発話者から独立する。

3）発話者（磯邊寺の住僧）「比待ちえたる櫻がり，比まちえたる櫻がり，山路の春に急がん。」　（桜川）

ワキ磯邊寺の住僧の「次第」の発話である。「発話の主体」の指示がないから，①－0の発話で発話者は発話の中に入り込み，発話者と発話とが直接結び付き，発話は発話者磯邊寺の住僧の「身」の中で終始する。ここまでは，①－0の発話に共通なことである。すなわち，「比待ちえたる櫻がり，山路の春に急がん。」という発話の「発話の主体」に発話者磯邊寺の住僧が入り込むのである。しかし，発話「比待ちえたる櫻がり」が想起させるところの，「櫻がり」の時を心待ちにしていた人々は多勢いて，発話者磯邊寺の住僧一人だけではない。里人の多くがこの時を待ち望んでいたのであって，発話者磯邊寺の住僧はそのなかの一人にすぎない。こうした場合の発話者と発話との結びつきは稀薄である。例えば，

発話者（東光坊阿闍梨祐慶）「旅の衣はすずかけの，旅のころもはすずかけの，露けき袖やしほるらむ。」　（黒塚）

において，発話者山伏と発話との結び付きが稀薄であるのと似ている。この発話が山伏一般のものであって，特に祐慶一人に限られたものではないからである。「旅の衣」や「露けき袖」の発話者との結び付きは，前述の「駒とめて袖うち払ふかげもなし」の発話における発話者と「駒」「袖」との結び付きに較べて稀薄である。同じ様に，発話者磯邊寺の住僧と発話「比待ちえたる櫻がり，山路の春に急がん。」との直接の結び付きは稀薄であって，むしろ，「櫻がり」の時を待ち望んでいた多ぜいの里人達の心を代表して発話している赴きである。とすると，この①－0の発話と重合している②－0の発話も前述の

発話者（山伏）①－0の発話　　→只とまらんと柴の戸を←発話者（賤の女）②－0の発話

発話者（鵜使い）の（身）①－0の発話→世の中をうしと思はば←発話者（鵜使い）（我）②－0の発話

と同じ様にはならないで，発話者磯邊寺の住僧の①－0の発話「比待ちえたる櫻がり，山路の春に急がん。」と重合する②－0の発話の発話者は磯邊寺の住僧を含めた里人たちを想定するのが妥当であろう。それは

発話者（小野の小町）「都は人めつつましや，もしもそれとかゆふまぐれ，」（卒塔婆小町）

の人目に近いものがあろう。このように，①－0の発話と重合している②－0の発話の発話者に想定される人はその「発話の状況」に応じて変化するが，その様々な人々が夫々に「同音」の発話者としても考えられることとなる。

II.「身」から「我」へ

「景清」に「松門の出」と呼ばれている発話がある。発話者は景清で,「発話の主体」も景清,「発話の主体」の指示はない。従って①－0の発話ということになる。悪七兵衛景清は「今は此世になき者と，思ひきりたる乞食」に身を落し，その名も「日向の勾当」と改め，世の中から独り離れて，藁屋に座し，空しい盲目の日々を送る。この藁屋は外界との交わりを断った景清の自己の象徴でもある。景清はこの藁屋の中にこもって，藁屋の外に展開する外界（世の中）と対峙している。この状態にあっては，景清の言動は，その「身」の中で行なわれ,「身」の外に出ることはなかった。しかし景清がその藁屋から外に出る日が来る。「身」の中にこもっていた自己は「身」の外に出て,「我」とその名を変え，世の中に生きる一存在へとその在り方を転換する。これが「松門の出」である。

発話者（悪七兵衛景清）「松門獨とぢて年月を送り，みづから清光をみざれば，時のうつるをも，わきまへず。闇闇たる庵室にいたづらにねふり，ころもかんだんにあたへざれば，膚は，げう骨と衰へたり。

発話者（同音）「迚よを，背くとならば墨にこそ，背くとならば墨にこそ，染むべき袖のあさましや，やつれ果てたる有様を，我だにうしと思ふ身を，誰こそありてあはれみの，憂をとふらふよしもなし，浮を訪ふよしもなし。（景清）

藁屋が発話者景清の閉ざされた自己の象徴であるとすれば，この藁屋のなかに座しているかぎり話相手があるはずもなく，景清が独り呟く発話は「松門独とぢて．．．」で始まる。景清は外界に目を向けることを断つために，みづから盲目となった。さて,「みづから」は「身づから」であるから，この「身」が「発話の主体」の指示になるだろうかという検討から始める。先ず,「身」について考える。話は「桜川」に飛んで，桜子がその母に届けた「文」に次の例がある。

扨も扨も此とし月のうきおもひ，みるも思ふもかなしさに，身をうりて東の方へ出づるなり。本より此身はまぼろしの，有にもあらぬ草ばの露，きえかへる身と思食て，後の世を願ひ給ふべし。（桜川）

「身」は「身体」の意である。「東の方へ出づるなり。」までは，「発話の主体」の指示がないから，①－０の発話で，発話者がその発話の中に入り込み，みづから「発話の主体」となってその発話全体を発話者の「身」のなかに包み込む。従って，「身をうりて」の「身」は「発話者の身」の意となる。「此身」「きえかへる身」いずれも自己を振り返ってみるときに使っている。このように，「身」はその意味からしても極めて発話者に結び付きやすいものをもっている。殊に，「発話の主体」の指示のない①－０の発話では発話者に結び付くことは必定である。同じ「景清」に発話者景清で「今まではつつみかくすと思ひしに，顕れけるか露の身の，置き所なや恥かしや。御身は花の姿にて，．．．」とあって，「身」の中に隠しておこうと思った自分のはかない露のような「身」「身のうえ」が露見する。「御身」は話相手の「身」「身体」の意で，その身体の中には話相手の自己が包みこまれていて発話者はそこへ立ち入ることができない。かくして「身」は発話者に極めて結びつきやすいから，冒頭の発話者景清の「みづから清光をみざれば，」の「みづから」には「身」の意味はごく僅かしか含まれていないにも拘らず，発話者との結び付きを感じてしまうが，これを「発話の主体」の指示であると決めるには抵抗があろう。そこで，「松門独とぢて．．．」の発話は「発話の主体」の指示のない①－０の発話とする。発話者景清は当然発話の中に入り込み，発話と直結する。発話者が閉ぢ，送り，見ず，弁へず，眠り，与えず等々，これらの行為は全て発話者の「身」の中で終始する。しかも，発話の最後を発話者景清は己の「身」を包んでいる「皮膚」について「膚はげう骨と衰へたり。」と結ぶ。抑，①－０の発話では「発話の主体」の代りに発話者が発話の中に入り込むわけだから，発話は発話者から独立できないが，発話者が目の前に居て「発話の主体」に代れば「発話の主体」の指示のある発話と同じ働きをするはずである。それ故，景清を目の前に置いて，景清以外の人がこの「松門独とぢて．．．」の発話をすれば，それは「発話の主体」景清について第三者が発話する発話となる筈である。これが発話者景清の①－０の発話と重合する発話者（？）の②－０の発話となる。そこで今度は此の発話者（？）を尋ねることとする。既に述べた通り，景清は「松門独とぢて」藁屋の中に座しているだけなのだから景清を目の前にして，②－０の発話をする景清以外の発話者など居ようはずがない。はるばる景清を尋ねてきた景清の娘人丸も，日向の里人も未だ景清の姿を見てはいない。そこで，この発話者（？）を景清自身の中に求めることにする。上述「鵜飼」の中で，

発話者鵜使い（身）①－０の発話→「よの中をうしと　←発話者鵜使い（我）②－０の発話
思はばすつべきに

とあった。これを上述の景清の発話に当てはめてみると，次のようになる。

発話者景清（身）①－０の発話→「松門独とぢて．．．←発話者景清（我）②－０の発話

．．．．

げう骨と衰へたり。

ここでもう一度「身」と「我」との関係を明確にした上で，上記の発話者景清（我）の役割を検討し，それを発話者「同音」の発話に繋げることとする。先ず，「身」から始めると，「身」は自己をその中に包み込んでいる身体であって，発話者が自己を顧みるときに使う観念的な存在である。

1．発話者自然居士　「居士はきと推量する子細の候。只今のふじゅに身のしろ衣と書いたるは，あっぱれ此人は身をうりたる人にて候べし。．．．」(自然居士)

2．発話者融の大臣　「秋はなかば身はすでに，老いかさなりてもろしらが，雪とのみ，積りぞ，きぬる年月の，．．．　(融)

3．発話者小野の小町　「今は民間しづのめにさへきたなまれ諸人に恥をさらし。嬉しからざる月日身につもって，百とせのうばと成りてさふらふ。．．(卒塔婆小町)

4．発話者平の経正の霊　「風枯木をふけば晴天の雨，月平砂をてらせば夏の夜の，霜の起き居も安からで，かりに見えつる草の陰，露の身ながら消えもせぬ，妄執の縁こ　そ，はかなけれ。」　(恒正)

1の身の代，身を売る，いづれも当人が自身を振り返って見る観念上の存在で，今ここに存在する生身を言うのではない。2．の「身は」自己を指示する「発話の主体」，「身体」の意を含む。3．自己の身体，観念的な存在。4．草葉の陰にいる露のような「身」で，未だ現実の時間と空間に顕われ出る前の，観念上の霊的存在。このように，「身」が自己をその中に包み込んでいる身体を指示し，発話者が自己を顧みるときに言う観念的な存在であるのと対して，「我」は自己がその「身」から外に出て，現実の世の中にその一員となって生きている時のその存在を指示する。「我」は現実の時間と空間の中の存在である。

1．発話者深草の少将の霊　「つつめど我もほにいでて，尾花，まねかばとまれかし。

(通小町)

上記「身」の4では恒正の霊は草葉の陰で「身」の中に留まっていたが，深草の少将の霊は僧の戒力にひかれて現実のこの世に「我」となって顕われ出る。「我」は空間に顕われ出るすすきの穂である。

2．発話者日蓮の従僧　「あの鵜つかいをみて思ひ出したる事の候。我二三ケ年さきに，あのいはうちと申す所を通りしに，あのごとくなる鵜つかひに行きあひて候

程に，老躰の身にてかかる殺生の事勿躰なき由申して候へば，げにもとや思ひけん。この僧を我屋につれてゆき一夜せっして候ひしよ。　（鵜飼）

「我」は過去の時間における存在も指示する。「我」は二三年前岩落に居た。「鵜使い」は「身」をふりかえる。発話者従僧は「鵜使い」になり代わって「我」を使う，「我屋」は現実感を添え，「鵜使い」の家を指示する。

3．発話者景清　「今まではつつみかくすと思ひしに，顕れけるか露の身の，置き所なや恥かしや。御身は花の姿にて，親子と名乗りたまふならば，殊我名も顕はるべしと，思ひきりつつうちすごす。我をうらみと思ふなよ。　（景清）

最後はまた「景清」に戻ることとする。包み隠しておこうと思ったはかない「露の身」が露見し身の置きどころがないという。身は過去の自己が包み込まれている身体である。「御身」が話相手を指示することは上述通り。「我名」は今現実の世の中に存在している「我」の名，従って，「日向の勾当」。「我を」の「我」は今この世の中に生きている「我」を指示する。

さて，再び「松門の出」に戻ろう。発話者景清の「松門独とぢて．．．」の発話は①－0の発話で，その発話は全て発話者景清の「身」の中で終始した。「身」は発話者の体内に納まっているかぎりは安定して「身」の外に展開する外界即ち世の中と対峙し，内から外を眺めている。然し，「露の身」とか，「今は此よになき者と。思ひきりたる乞食」とか世の中における「身」の位置を定めておけば「身」は安定して，対峙している「世の中」と平衡を保っているが，一旦，この平衡が崩れると，上例「我」の3のように，「身」の置きどころがなくなってしまう。今のところ景清はその「身」の象徴である藁屋の中に座して外界と対峙し，世の中における「身」の置きどころを定めて，「身」の内外を眺めているかに見える。これが「松門の出」の発話者景清の①－0の発話で，「身」の内から外へ向かっての発話である。そしてこの①－0の発話にはそれが発話者の一方的な発話ではなく，世の中で安定した位置に置かれていることを示すために，それと重合する②－0の発話が内蔵されている。

発話者景清（身）①－0の発話→「松門独とぢて．．．」←発話者景清（我）②－0の発話

既に述べたように，発話者景清（我）の②－0の発話とは，発話者景清（我）が景清（身）を目の前において「松門独とぢて．．．　」と発話すると，世の中に生きている一存在である景清（我）が外側から藁屋の内の景清（身）を眺める発話となるということである。ここで，「人称」（personne）という語を借用して言えば，発話者景清の1人称の発話はそのまま景清についての3人称の発話となる。即ち「発話の主体」の指示のない発話においては，1人称の発話は常に3人称の発話をその中に内臓している。

さて，ここで発話者景清（我）を発話者同音にかえて，つまり，発話者景清（我）＝発話者同音となって，次の発話が始まる。「迚よを，背くとならば墨にこそ，．．．」そして発話者同音＝発話者景清（我）である証として，この発話の中の「我だにうしと思ふ身を，」を取り上げる。誇張して言えば，世の中に生きている一存在としての「我」が自己の象徴である藁屋の中に独り座している，顧みられる観念的な存在「身」を「もの憂い」と思う，つまり，外から内を見た発話である。この視点に立つと，発話者景清（身）の発話「松門独とぢて．．．　」は内から外をみる発話，発話者同音の発話「迚よを，．．．」は外から内をみる発話となりそうであるが，実際には，①－０の発話は②－０の発話と重合している，「発話の主体」の指示のない発話においては，１人称の発話は常に３人称の発話をその中に内臓しているのだから，発話自体に変化があるのではない。「迚よを，背くとならば墨にこそ，」という同じ発話をこの発話の「発話の主体」である景清が発話者となるか，それとも景清以外の人が発話者となるかで発話の視点が全く変わるわけである。即ち，発話者が景清（身）から同音＝景清（我）に代って，発話の視点に変化が起るのである。「我だにうしと思ふ身を，」を考える。

1　発話者白龍①－１の発話→「はくれう衣を返さねば，」←発話者天人②－１の発話
2　発話者盛久①－１の発話→「我なまじひに弓馬の家に生まれ，」←発話者同音②－１の発話
3　発話者同音①－１の発話→「我だにうしと思ふ身を，」←発話者景清（身）②－１の発話
　　景清（我）

１，２，３とも「発話の主体」の指示がある①－１の発話だから，発話は発話者から独立し，「発話の主体」の「はくれう」，「我」も発話者から独立していて，これらの「発話の主体」は発話者及びその話相手から等しい距離に位置し，発話者とその話相手とは互いにその立場を交換することができる程に，その考えや心情を理解しあう。この点については既に述べた事であるから，発話の視点に限ってみてみると，１では，この発話を発話者白龍がすると白龍のほうは，衣を返して貰えないことが分っている天人に向かって，衣を返さぬことの再確認をすることになる。又，天人が白龍のこの発話を聞く場合には，天人の困惑が分っているのに再度衣を返さぬことの念を押す白龍の底意地の悪さを思い知らされることとなる。同じ様に，３の場合には，発話者同音は景清の「身」にむかって自分で自分を疎ましいと思うことの再確認を迫り，これを聞く景清の「身」は我が身の疎ましさについて再度念を押されることとなる。今，景清の「身」のほうを中心にして考えると，自分で自分が疎ましいことはもう分っているのだから，今更それを発話するまでもない。他人の説明が当を得たものなら，

他人の発話にまかせて，自分はそれに応じた仕草をすれば事足りるということになる。そこで，自分のことを理解している他人を設定してこれに自分のことを発話してもらう，この自分ではない他の発話者が「同音」で代表される。そして，その発話の視点は外から景清の「身」＝身体を説明する。而して発話を発話者同音に任せた景清の身体は，「憂をとふらふよしもなし」の発話を聞いて「シホル」仕舞をする。発話者同音とその発話の視点を理解するために「蟬丸」の発話を調べる。

発話者（逆髪）「我は王子なれども疎人に下り，髪は身上よりおひのぼって星霜をいただく。是みな順逆の二つなり。おもしろや。（カケリ）柳のかみをも風はけづるに。（スミへ出）　　（　）内は仕舞の型を示す。

発話者（同音）「風にもとかれず，（スミトリシナガラ左手デ髪ヲトル）

発話者（逆髪）「手にも分けられず。（取ツタ髪ヲミル）

発話者（同音）「かなぐり捨つる御手の袂，（左ヘマワリ手ヲオロス　大小前へ）

発話者（逆髪）「抜頭の舞かや，浅ましや。（小マワリサシヒラキシホル）

発話者（同音）「花のみやこを立ち出でて，花のみやこを立ち出でて，うきねに鳴くか賀茂川や，末しら川をうちわたり，粟田，口にも着きしかば，今は誰をかまつ坂や。関の，こなたと思ひしに，跡になるや音羽山の，名残惜しの都や。松虫，鈴虫きりぎりすの，鳴くや，夕かげの山科の，里人もとがむなよ。狂女なれど心は，清滝川と知るべし。

発話者（逆髪）「逢坂の，関の清水に影見えて，

発話者（同音）「今や引くらん望月の，駒の，歩みもちかづくに，水も，走井の影みれば，我ながら浅ましや。髪はおどろをいただき，まゆずみもみだれくろみて，実さか髪の影うつる。水をかがみとゆふ浪の，うつつなの我すがたや。（蟬丸）

「我は王子なれども」と「我」という「発話の主体」を指示したのは，発話者逆髪が「狂女」であり，又，延喜第三の御子であるから，自己の存在を誇示して憚らなかったためである。さて，発話の視点に話を移して，「柳のかみをも風はけづるに，」と発話者逆髪は柳の枝を風が櫛けづるのをみて発話する。発話の視点は発話者逆髪から外の柳の木へ，逆髪を中心に考えると，内から外への発話となる。ところが，次の「風にもとかれず，」発話者同音の発話は逆髪の髪が逆立って風になびかぬ様を外からみての発話だから，発話の視点は外から内へとなる。こうして，「手にも分けられず。」は内から外へ。「かなぐり捨つる御手の袂，」は外から内へである。然し例えば，「手にも分けられず。」を発話者同音が発話すると発話の視点は外から内へとなるから「発話の視点」の決定は「発話者」にあって，「発話」にあるのではない。「道行」は発話者同音であるから，道行をする本人逆髪にとっては外から内へ

の発話の視点をもつことになる。これが発話者ワキ僧の普通の道行だと「発話の視点」は内から外へとなる。発話自体に違いがあるわけではない。

発話者（ワキ僧安居院の法印）「花の都を立ち出でて，花の都を立ち出でて，あらしにつるるゆふ浪の，しら河おもて過ぎ行けば，音羽の滝をよ所にみて，せきのこなたのあさ霞，．．．（源氏供養）

冒頭の「「花の都をたち出でて」の発話は，①－０の発話であるから発話の中に発話者法印が入り込んで，発話と直結する。即ち，発話者法印が都を出て，白河表を過ぎ，．．と，発話者中心に展開する。然し，「蟬丸」のほうは発話者同音が「発話の主体」として「逆髪」を目の前におき，その上で「花のみやこを立ち出でて」と発話することではじめて，逆髪が花の都を出ることとなる。「発話の主体」の指示がない発話の場合，発話は常に発話者に結び付くから，発話者同音の①－０の発話を逆髪に結びつけるためには，逆髪が目の前に居るだけでは足らず，発話に応じて，自分が「発話の主体」であることを「仕舞」の型で示さねばならない。「花のみやこを立ち出でて」の発話者同音の発話で，逆髪は「拍子を踏み，右受け，正へ出る」仕舞の型を見せて自分が「発話の主体」であることを訴える。また，①－０の発話は，常に②－０の発話と重合する。「発話の主体」の指示がない１人称の発話は常にそのなかに３人称の発話を内臓するから，発話者同音の「道行」の発話は目の前に「逆髪」を置いたり，仕舞の型をしたりすることと相まって「発話の主体」逆髪を外から内への視点で眺める発話に見せる配慮を怠らない。しかし，「発話の主体」を外から内への視点をもつ発話だけ続けることには無理がある。もともと１人称の中に３人称の可能性が含まれて居るわけで，②－０の発話だけでなく，①－０の発話を逆髪が使ってその存在を主張することが不可欠である。「逢坂の関の清水に影見えて」は①－０の発話で，発話者が発話の中に入り込みその存在を示す。また，道行は全て外から内への視点をもつ発話であったが，この有名な貫之の歌の上の句は，内から外への視点をもち，逆髪が関の清水のほとりに居て，水面を見る。すると又，発話者同音の逆髪を外から見る発話で，「我ながら浅ましや。」と「うつつなの我すがたや。」とに注意する。発話者同音の発話の中の「我」は発話者の「我」でもあるが，発話者が「発話の主体」逆髪になり代って「我」と発話している傾向が強い。既に引用した「鵜飼」の例，発話者日蓮の従僧「．．．老躰の身にてかかる殺生の事勿躰なき由申して候へば，げにもとや思ひけん。此僧を我屋につれてゆき一夜せっして候ひしよ。」この「我屋」は老体の鵜使いの家のことである。発話者従僧は発話の中で「鵜使い」に素早くなり代って，「我屋」と発話するのだが，「我」の存在の主張が強くなかった頃は，話相手も存在を主張せず，そのため容易に素早く発話者は話相手に成り代わって，「我」を使うことができたように思われる。即ち，発話者従僧→我←老体の鵜使いの関係において，発話者と発話者の「我」との距離と，鵜使いと鵜使いの「我」との距離が等しく，発話者が話相手の

鵜使いに成り代わったり，乗り移ったりすると，両者の「我」が重り合う事になる。それと同様に，逢坂の関の清水に「我」を映して「我」の現実の姿を知ろうとする逆髪の「我」と発話者同音の「我」が重なる。そして1人称のなかに含まれている3人称しか知らない「我」は水鏡の中に真実の「我」を見ようとしているようである。地獄へ行って娑婆で犯した殺生の罪を責められている猟師の霊が，内から外への視点の発話，「うとうはかへって鷹となり，」とその存在を示すと，発話者同音は「我は雉とぞなりたりける。」と素早く猟師の「我」に成り代わる。

註1 発話行為（énonciation）の問題に関しては，次の著作を参考にした。
BENVENISTE E. Problèmes de linguistique générale. Gallimard,(1987)
KERBRAT-ORECCHIONI C. L'énonciation de la subjectivité dans le langage, A. Colin,(1980)
FONTANILLE J. Les espaces subjectifs, introduction à la sémiotique de l'observaterur, Hachette,(1989)
ADAM J.-K. Elements de linguistique textuelle, Mardaga,(1990)
MAINGUENEAU D. Eléments de linguistique pour le texte littéraire,Bordas,(1990)
MAINGUENEAU D. L'énonciation en linguistique française, Hachette,(1993)
COURTES J. Sémiotique narrative et discursive, Hachette,(1993)
COURTES J. Analyse sémiotique du discours, Hachette,(1991)
EVERAERT-DESMEDT N. Sémiotique du récit, Editions universitaires,(1989)

註2 引用した謡曲文のテキストには，「日本古典全書上，中，下」昭和24年朝日新聞社刊を用いた。尚，漢字の一部を当用漢字に改め，上歌，下歌，さしこえ等の語句を省略した。

註3 謡曲文のフランス語訳には次の著作から引用した。
SIEFFERT R. Théâtre du moyen âge, P.O.F. (1979)

Relations de personne dans le japonais

Shin′ichi TOMITA

La catégorie de la personne n′ a pas qu′ une dimension référentielle; elle est également impliquée dans la modalité, c′ est-à-dire dans la relation qui s′ établit entre le sujet d′ énonciation et le sujet d′ énoncé.

Dans la Forme ①, le sujet de l′ énoncé coïncide avec le sujet d′ énonciation.

Forme ①－0, Taïra no Tsunémasa : 《un instant apparu à l′ ombre des herbes
je suis rosée mais encore ne s′ est dissipé
le lien d′ une aveugle passion
vaine en vérité》 (Tsunemasa)

(le je ne réfère pas une réalité extérieure mais à l′ individu qui dit 《je》)

Forme ①－1, Taira no Morihisa : 《Moi qui des années et des mois durant en Kanzeon de Kiyomizu ai placé ma foi, jamais je n′ ai un seul jour omis de lire son Livre.》 (Morihisa)

Dans la Forme ②, le sujet de l′ énoncé n′ est pas identique au sujet d′ énonciation.

Forme ②－0, Sano no Tsunéyo :
《...voilà qui rappelle le sentiment qu′ évoque l′ antique poème
arrêtant ma monture
pour secouer ma manche il n′ est d′ abri aucun
au gué de Sano crépuscule de neige》 (Hachinoki)

Forme ②－1, Chœur : 《les parents dans les airs des larmes de sang
font pleuvoir de peur d′ en être trempé》
(Ut)